

幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発 (I)

深澤 清治 松尾 砂織 岡野 佳子 松島 英恵 江本 繁子 岡 芳香
奥井 京子 中山 貴司 林原 慎 居川あゆ子 桑田 一也

I はじめに

本研究の目的は、幼小中一貫教育力を基盤とした国際交流学習のためのカリキュラム開発をめざす具体的な取り組みとして、教材・単元開発を行うことである。本学園では、2003年に研究開発校指定を受けて、国際コミュニケーション能力を育成するための新領域「国際交流学習」を設置・試行を始めたところである。その中で、外国についての知識を単一方向的に増やす国際理解にとどまらず、教室という生徒にとって最も具体的場面において実際に世界の人々と直接的な交流活動を行いながら、双方向的な多文化理解をめざすこと、またそれを通して自らの文化をよりよく理解し、大切にすることを育てることをねらっている。

この目的を達成するために2003年4月より国際交流学習開発部会プロジェクトを立ち上げ研究を開始した。そして、研究を次のように設定した。

研究テーマ

グローバル社会に生きる日本人としての基礎的な国際的コミュニケーション能力の育成を図る幼小中の発達段階に応じた学習の開発

なお、ここでの「国際コミュニケーション能力」とは「確かな学力を基にさまざまなメディアを駆使して多文化を理解したり、人々と国際的コミュニケーションしたりする能力」と定義した。園児・児童・生徒を取り巻く社会のグローバル化が著しいこの21世紀において、世界の中の日本に生まれた私たちが幼小中段階でどのような国際的コミュニケーション能力を身につけるべきかを考え、その能力養成のためには、幼小中の発達段階に応じてどのような学習方法をとるべきかを開発するための研究である。

テーマ設定の背景

本テーマ設定には、大きく分けて次の2つ背景がある。一つは私たちが生活する日本という地理的環境条件にもとづく外的背景である。四方を海に囲まれた島国で、ほぼ単一の言語・文化に近い状態が続いた中で、国民性として「以心伝心」のこばに代表されるようにあえてこばにしなくても分かり合える世界、すなわち人類学者Edward Hallの言う「高コンテクスト文化」が存在している。これに対して、諸外国の中には多言語・多文化・他民族共生の社会も存在し、聞き手と話し手の間に共有部分が少ないため、自分の気持ちや考えをまずこばにしていける必要のある世界、「低コンテクスト文化」が存在する。これからの社会の中で「地球人」として生きていくためには、自他の文化への理解と愛着が必要となってくる。

もう一つの背景として、超少子化社会の中で人と人とのコミュニケーションが希薄になりつつあることへの懸念がある。自分と考え方の違う人、つまり文化の違う人とどのようにコミュニケーションを図り、うまくいかなかったらどのようにこばで修復していくのか、交流を通してそのような人間関係調整能力も求められる力である。

このような日本社会を取り巻く、外的および内的ニーズをもとに、研究テーマを設定した。

II 研究のねらい

まず、国際交流学習を通して、めざす子ども像を次のように設定した。

めざす子ども像

21世紀のグローバルな社会の中で、日本人としての自覚を持ちながら、Universal Standard (世界標準) で生きることができる子どもたち

また、めざす子ども像を実現するために、つぎのよ

Seiji Fukazawa, Saori Matsuo, Keiko Okano, Hanae Matsushima, Shigeko Emoto, Yoshika Oka, Kyoko Okui, Takashi Nakayama, Shin Hayashibara, Ayuko Igawa and Kazuya Kuwata : Developing International Exchange Study which was consistent from the kindergarten to the junior high school (I)

うな4つの「つきたい力」を設定した。

- ①Multi cultureを受け入れ、理解し、それを尊重しようとする態度や能力
- ②異なる文化や考え方を持った人たちとの共生を求める態度や能力
- ③日本人という個人の立場で自己を理解し、自国での言葉で自己を表現する能力
- ④国際社会で、相手の立場を尊重しながら自分の意見を明確に表現するための外国語を使ったコミュニケーション能力

このような目標のもとに、初年度は各校種において子ども間のコミュニケーションから留学生を招いての交流授業まで、次のような取り組みを展開した。

Ⅲ-①中学校の実践事例の概要

国際交流学習のカリキュラム開発に向けて、本年度は主に広島大学の留学生と様々な交流学習を実施した。中学校においては、留学生5名と広島大学附属三原中学校1年生42名、また広島大学附属三原中学校3年生83名が留学生2名と2週に渡って交流学習を実施した。ここでは中学校3年生の概要を以下にまとめる。

【学習計画】

学年：広島大学附属三原中学校3年生 83名

題目：「英字新聞をつくろう」

目標：

- ①交流学習を通して、分かったこと・考えたことなど自分の意見を載せた英字新聞をつくる。
- ②附属三原中学校3年生の学校生活を伝える。
- ③二人の留学生にあるテーマにもとづいたインタビュー内容を考え、質問して記事にまとめる。

指導計画（全13時間扱い）

12月 2日 交流学習に向けての説明 英字新聞のテーマについて説明→テーマ決定

12月 3日 情報収集①

12月 9日 情報収集② 交流学習当日の流れ確認

12月10日 第一回交流（スリランカ出身男性）

12月12日 アンケート実施（成果と課題）次時へ

12月15日 情報収集③

12月16日 本校ALTによるスペルチェック

12月17日 第2回交流（リーマニア出身男性）

アンケート実施（成果と課題）

12月18日 授業終了

冬休み（12月19日～1月7日）

課題のまとめ→新聞下書き作成

1月13日 新聞作成①～③（3時間確保）

1月30日 まとめ（発表予定）

【学習内容】

英字新聞を作って、集めた情報をまとめるのがこの学習の目標である。双方向のコミュニケーションを成立させるために、留学生との交流学習を計画した。その際に留学生に質問して情報を得る「受信型活動」と自分たちの学校生活を伝える「発信型活動」の2つの活動を班活動で計画した。相手の国に対して関心のある「テーマ」を1つ選び、本やインターネットを利用して事前情報を集める。質問したい内容をインタビューして、留学生にその実際を説明してもらい、その実態を明らかにする。生徒は交流を通して考えた3国の相違点をまとめ、自分の意見や考えをまとめる。

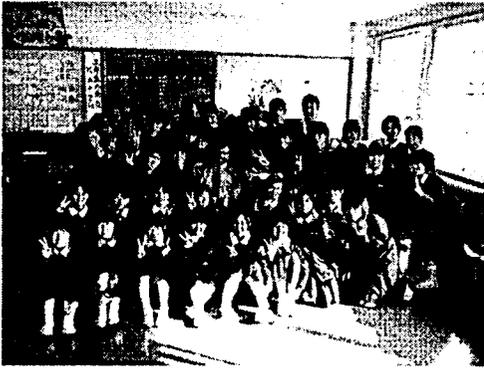
【授業の実践】

生徒の実態としては、留学生の出身国であるスリランカとルーマニアに対する認識度が低かったために、事前の情報収集にはかなりの時間を要した。また、双方向のコミュニケーションに対する姿勢や考え方を十分に押さえ切れていなかったために、1度目の交流では様々な課題があがった。1度目の交流学習後に行った授業では、1週間後に控えた2度目の交流学習に向けて、次のような意見があがった。

課題：「コミュニケーションをとる」場面で「これはまずいぞという態度」は何でしょう？

→「こんな聞く態度はいけない！！」

- ・ランジャンさんが話しているのに友だち同士で話したり（私語）すること。これは相手に対してかなり感じが悪い。
 - ・人が話をしているときに、他の人と話をする。
 - ・日本語を使うのはまずい。こそこそ日本語でしゃべるのは不快。
 - ・話しているときに照れ隠しで笑うのはまずい。
- 「Communicationしたいのにこの態度では伝わらない！自分らの発表する態度は！！？」
- ・小さな声でぼそぼそ発表するのは何だか失礼
 - ・あいまいな答えをする、相手を笑ったり、相手に不快を与える行い全ていけない。
 - ・自信を持って話さない、話を真剣に聞こうとしない態度。
 - ・表情を暗くする。
 - ・無言で止まってしまったり、下を向いて言っていたり、プリントばかり見て、自分の言葉が出ないこと。これはちょっと失礼かも！！



【生徒の様子】1回目「ランジャンさん」との交流

生徒の交流学習に対する学びを調査するために、1回目の交流学習直後に、アンケート調査を実施した。設問内容については次の通りである。

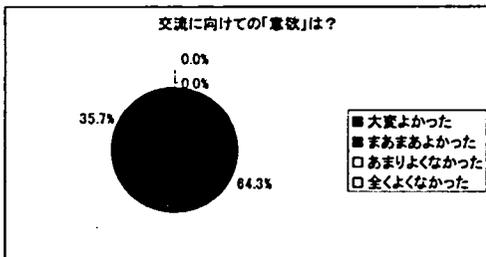
実施したアンケートの内容

アンケートは4段階試問と2段階試問と記述の3種類で実施した。

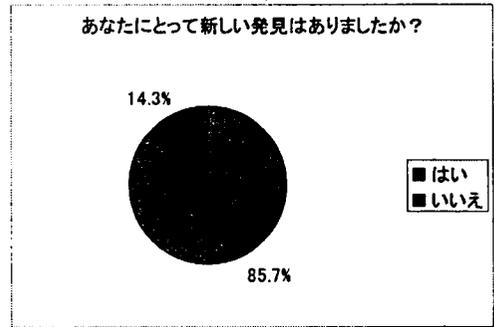
1. ランジャンさんとの交流にむけての「意欲は？」
2. 交流に向けての「準備は？」
3. 交流をして「どんな印象を持ったか？」
4. 交流をして「新しい発見・学びがあったか？」
→何を学んだか？（記述）
5. 交流をして「面白さ・楽しさがあったか？」
6. あなたにとって外国人と交流学習をすることは？
7. 交流学習をする上で英語が必要か？
8. 交流学習をする上で必要な力は？
9. あなたがすでに持っていると思う力は？
10. これからつけたい力は？
11. 少しでも自分から会話しようとしたか？
12. あなたにとって新しい発見があったか？

アンケート集計結果（一部抜粋）

1. 交流に向けての「意欲は？」
大変よかった 48.1% まあまあ 45.5%
あまりよくない 6.5%



12. あなたにとって新しい発見がありましたか？
はい 96.1% いいえ 3.9%（3人）



12. 「その新しい発見とは何ですか？」（記述回答）

【異文化関すること】

- ・異文化交流の難しさと楽しさ。
- ・日本とちょっと違うにおいがした。
- ・国が違って言葉が通じればどんなことでも達成できるということを発見した。
- ・日本とは共通点もあれば全然違うところもあることが分かった。
- ・外国の人と交流するのはやっぱり楽しいことだと思った。知らない国の人と交流することで、その国の文化が知れるからとてもためになると思った。

【英語に関すること】

- ・英語で会話することってとても楽しいと改めて思った。難しいし、分からないからこそ楽しい。
- ・喋嗟に話そうとしても辞書とかがないと話せないことに気づいた。
- ・結構聞いて分かる単語があった。
- ・全然聞き取れなかった。もっと力を付けるべき。
- ・共通で話すことができる英語はこれからすごく大切なんだなあと思った。
- ・英語は世界で通用する言語だなあと改めて思った。

★「新しい発見がなかったわけは？」（3人記述回答）

- ・自分から話しかけたりしなかったし、聞き取れなかったから。
- ・ランジャンさんに質問したときに英語が全然分からなかったから。
- ・国によって違う雰囲気があった。

【成果と課題】

今回の実践は、コミュニケーション活動の一環として、伝えることと情報を受け取るという二つの活動を取り入れ、知り得た情報を整理し、自分の意見や考えをまとめるという活動である。生徒にとって関心のあるテーマ設定をすることで、課題発見学習に対する意欲が高く、交流学習に対しても積極的に行えた。また、

英語に対する必要性を考えた生徒が多く、今後の英語学習に対する見方を改めた生徒が多く見られた。今後の課題としては、交流学習に至る前に「交流相手の出身国」の事前調査が不十分であったことと、「双方向のコミュニケーションの在り方」を考える時間が取れなかったために、実際の交流学習の場で（特に1回目）自信を持って自分の意見を述べるまでに至らなかった反省があったが、生徒は1度目の実践から多くのことを学び得たようだが、事前の押さえが必要だと感じた。

Ⅲ-②小学校の実践事例の概要

小学校では1～3年生において、子ども達が多文化理解を深めながら4年生以降の英会話学習におけるコミュニケーションスキルの向上へ向けて意欲を高めることができるようにするため、外国人との交流学習を計画的かつ積極的に取り入れている。ここでは、広島大学の留学生と長期的に行った3年生の交流学習について取り上げる。

【単元について】

- 学年：広島大学附属三原小学校3年生 39名
- 単元名：「留学生の人たちとお友達になるための方法 Part 3」
- 実施期間：平成15年11～12月
- 単元について

この単元は、広島大学の留学生と長期的にコミュニケーションを取りながら交流学習を行う中で、交流を目的とした遊びを企画する際に自国の文化を振り返ったり留学生の母国について調べたりする学習を通して多文化理解を深めるとともに、留学生とコミュニケーションを図るための英会話を学ぶことを通してコミュニケーションスキルの向上を意識させる学習を行うものである。交流相手には、広島大学よりアジアからの留学生8名をお願いし、8つのグループに分かれて交流活動を行うための計画・準備・実践・振り返りを行う。

○子どもの実態

子どもの国際交流学習への期待は大きく、留学生との交流学習への意欲も強い。この単元に至るまでに2回の外国人との交流学習を経験しているが、これら交流学習を「楽しい」または「やや楽しい」と感じている子どもが、1,2回目とも100%であった。しかし「この交流で自分の思っていることをきちんと伝えることができたか」という項目に対して、1回目に「余りできない」または「できない」と感じた子どもが21人(53.8%)、2回目は8名(20.5%)であった。その理由として、「英語でのコミュニケーションがうまく

できないから」というものはほとんどなく、「伝えたいことが見つからない・ない」「はずかしい」などが多数を占めた。これは、この2回の交流活動を行う際に、一人ひとりの子どもが留学生と交流できる時間が十分に保障されていなかったり、留学生の人数が3～4名と少なく全体的な活動に終始していたりしたためと思われる。

○活動に当たって

この度は留学生を8名の様々な国からの留学生を招くことで、多岐にわたる活動が展開できるようにする。また、留学生の出身国や趣味、特技などの情報を生かして一人ひとりの留学生と密に交流することができるようにする。そしてコミュニケーションしたい内容とその方法を子ども達にしっかりとつかませるだけの時間的・物理的な保障を行い、一人ひとりの子ども達が実感を持って外国の人々とのコミュニケーションを図ることができる満足感が得られるようにする。英会話のコミュニケーションスキルの向上に関しては、英語やローマ字を用いた手紙の交換、挨拶などの英会話学習を取り入れ、必然性のある学習を行うようにする。

○単元の目標

- ・ 留学生の国や自分の国の文化を調べたり体験することを通して、お互いの国の文化の違いを感じたり共通性を見つけながら、それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つことができるようにする。
- ・ 自分たちと生まれた国が違う留学生の気持ちを考えながら、共に活動するための準備をしたり実際に楽しく遊んだりすることができるようにする。
- ・ 自分の得意なことやできそうなことを考えて進んで交流活動の準備をしたり、自分の思いを日本語でしっかり留学生や友だちに伝えることができるようにしたりして、自分自身の納得のいく活動を行うことができるようにする。
- ・ 留学生との英語でのコミュニケーションを図る場面を設定することで、もっと自分の気持ちや考えを英語で伝えたいという思いや、進んで英語を学ぼうとする意欲を持つことができるようにする。

○学習計画（全20時間抜粋）

- 第1次 留学生との交流計画 (2時間)
- 第2次 グループごとの交流計画と準備
 - ・ 情報のリサーチ・・・・・・・・・・2時間
 - ・ グループごとの活動・・・・・・10.5時間
 - ・ 交流会準備・・・・・・・・・・3時間
- 第3次 交流会 (1.5時間)
- 第4次 また会うための方法を考える (1時間)

【授業の実際】

○第1次

実際に8名の留学生を写真と簡単な情報(名前・性別)で紹介し、一人ひとりの子ども達に「会ってみたい。」という意欲が生まれるようにした。次にその自分たちの会いたい気持ちをビデオレターとして映像化し、実際に留学生に送った。

○第2次

まず、ビデオレターの返事をビデオで鑑賞し、お互いの思いが共通であったことを確認し交流学習への意欲化を図った。そして、各留学生の詳しい情報収集を行うための手紙をグループごとに書いた。グループは生活班とし、機械的に1班に一人の留学生をあてはめた。情報の内容は全体で話し合い、ニックネーム・出身国・生年月日・趣味・特技・好きな科目などとし、指導者の作った英語のプリントにローマ字や本などで調べた英単語を用いてグループで記入した。(2時間)数日後、返ってきた手紙を基に、グループごとに各留学生の情報を全体に伝えるための提案資料作り(模造紙大)を行った。提案内容は、名前・似顔絵・ニックネーム・出身国・生年月日・特技・得意な教科とし、英語と日本語で記入した。この情報交流会を通して、各自が交流してみたい留学生を決め、話し合っ8つの交流グループを構成した。(3時間)

交流グループごとに、留学生の出身国や特技に関する調べ学習を行った。インドネシア出身の男性留学生担当のグループは、この留学生がスポーツをすることが特技という情報を得たことからインドネシアで有名なスポーツについて調べ学習を行い、「バトミントン」という単語を引き出した。そして留学生とバトミントンを通して交流を行うことに決め、ルール調べ・コート作り・点数表作成・対戦表作成・バトミントンの練習などのグループ学習を行った。また、バングラデシュ出身の男性留学生との交流グループは、この留学生の特技が料理であることから、バングラデシュ料理について調べ学習を行い、「カレー」にポイントを当てた。宗教上の問題から留学生が用意したカレーをバングラデシュ流の食べ方で食べる体験と、自分たちでデザートと一緒に調理することにし、その準備をグループで行った。このように8つの交流グループの活動は多岐にわたるため、お互いの活動を共通理解できるようにするために、各留学生の出身国などの調べ学習の際には情報交流会を行った。(10.5時間)

交流会の準備にあたっては、当日と同じ場の設定や進め方のリハーサルなどを行って、交流会が効果的に行えるようにした。また、留学生への招待状や当日交換する名刺を作成したり、お迎えや送る際の挨拶の仕

方を英会話教室講師の保護者をお迎えして学習したりして、当日に向けての活動の意欲化を図るようにした。(3時間)

○第3次

留学生を招待しての交流会では、各グループの活動してきたことを十分行えるように、複数の場を設定したり60分授業となるように時間を設定したりした。当日の交流内容は、次の通りである。

①インドネシアの留学生とバトミントンをする、②ラオスの留学生とセバタクロウをする、③ラオスの留学生とお茶会に参加する、④ミャンマーの留学生と合奏をして交流する、⑤ネパールの留学生と校内の山に登る、⑥ガーナの留学生とチョコバナナを作る、⑦バングラデシュの留学生とカレーと一緒に食べる、⑧バングラデシュの留学生と詩の発表会をする、8つである。活動の進行としては、名刺交換と英語によるお互いの自己紹介や挨拶の後、グループ活動を行った。活動時間は約40分間で、自分たちの計画した内容を各自の活動場所で行うようにした。グループ活動後、全体で集合して活動の様子をデジタルカメラで写したのを見ながら交流し合った。最後に全体で合唱、さよならの英語の挨拶をグループごとに行って学習を終了した。

○第4次

交流会を終えて、これからもお互いの関係を続けていくための行動として、交流相手に手紙を書き、交流会当日の写真と共に留学生に送った。今後も留学生とビデオで交流を行うように計画している。

【成果と課題】

子ども達は、留学生に関する調べ学習を行うことを通じて、相手国への理解や留学生本人に対する愛情を深めることができ、実のある国際理解を行うことができた。また今回8人の留学生が交流学習に参加できたことにより、子どもの学習への参加意識を高めることができ、子どもも留学生も一人ひとりが生かされる交流活動になっていた。

学習後のアンケート調査では、「この交流で自分の思っていることをきちんと伝えることができたか」という項目では、「余りできない」「できない」5名(12.8%)という結果であった。これは前回のアンケートの結果をやや下回っていた。このことは、自分の交流してみたい内容にそって自分たちでプログラムを考えながら取り組んだことや、留学生自身との交流を密にするために手紙やビデオなどを活用したことなどによる実感のある交流を意識したことが要因としてあげられるのではないかと考える。また、「余りできない」「できない」と回答した子どもの取り組んだ内容

が、音楽発表的なもので交流活動を活発化できない内容であったことも原因と思われる。運動や料理など共に活動することができる内容の方が、交流を活発に行え充実感を伴った活動になっていた。子ども達の英語のコミュニケーションスキルの向上に対する意欲に関しては、一部英単語を書いて手紙や名刺にしたり挨拶を覚えたりすることが交流に活用できるため、楽しんで英語を学ぶことができた。

Ⅲ-③幼稚園の実践事例の概要

【1・3歳児 もも組の実態】

3歳児 もも組の実態を平成15年5月に実施した保護者へのアンケートの結果から見てみる。

○コミュニケーション能力に関するもの

- ・家庭で友達と遊ぶ機会がありますか？については多くあるが20%・時々あるが40%・ほとんどない、ないが40%である。
- ・自分の思ったことを言葉で伝えることができますか？については96%の子どもたちが相手に言葉で伝わるように話せている。
- ・今までに外国の方とかかわる機会がありましたか？については多くあるが8%・時々あるが30%・ほとんどない、ないが62%である。

○多文化・異文化理解に関するもの

- ・外国の昔話や民話を話して聞かせる機会がありますか？については時々あるが78%・ほとんどないが22%である。
- ・日本の昔話や民話を話して聞かせる機会がありますか？については多くあるが17%・時々あるが35%・ほとんどないが48%である。
- ・日本の楽器に触れる機会がありますか？については時々あるが17%・ほとんどないが39%・ないが44%である。

アンケート結果から考えて子どもたちの多くは、家庭では、友達とのかかわりは少なく家族とのかかわりが人とかかわりの中心となっている。このことから3歳児の頃には幼稚園が友達とのコミュニケーションの能力を育む大切な場になっていると考える。

また、家庭の中では絵本の読み聞かせなどを通して外国の文化に触れる機会はあるが、子どもたちの生活の中には自国の文化に触れる機会が少ないことがわかった。そこで幼稚園においてできるだけ自国の文化に触れられるよう意図的に活動を計画していきたい。また、自国の文化だけではなくいろいろな環境を準備しかわりを広げたり、深めたりできるようにすることが大切だと考える。

〔事例1〕

(1)ねらい

- ・ものとかかわりを通して友達とのかかわりを楽しむ。
- ・自分の思いや考えを言葉で話し、友達と楽しさを共有する。

(2)保育者のかかわり

○環境構成

- ・世界地図や地球儀を保育室に準備する。
- ・保育室にある遊具や飼育物などにひらかなと英語で名前を書いておく。

○保育者のかかわり・援助

- ・子どもたちの会話に心を寄せ大切にする。
- ・子どもたちがより関心がもてるように、友達のつづきや会話の様子を知らせる。
- ・子どもたちがかかわっているのに出会ったときは、その場に加わり子どもたちと一緒に会話を楽しむ。

(3)とりくみ

～世界地図を見ながら～

世界地図を保育室に掲示して2～3日過ぎた日

- O「先生 これなあに？」
T「世界地図だよ、地図って知っている？」
O「知っているよ。道を教えてくれるぶんだよ」
T「そうね、よく知っているね」
k「車でいった時に見たよ、お父さん持ったよ」
O「見たことあるね」
O「でも、違う？前に見たのと違う」
T「そうね、この地図は道を知らせる地図とは違うのよ。これはいろいろな国の在る所を教えてくれる地図なのよ」
O「いろいろな国を教えてくれるの？」
k「じゃ、龍君(9月に一週間、園生活を一緒に過ごしたアメリカの友達)の家はどこ？」
T「龍君の家はどこだったかな？」
k「アメリカ」
T「アメリカはここよ」といいながら、アメリカを指差す。
O「そうか？」
O「じゃ、僕の家はどこ？」
T「ここよ」と日本を指差す。
S「僕の家は？」
T「ここよ」と日本を指差す。
k「○○君の家は？」
T「ここよ」と日本を指差す。
O「おかしいな？どうして同じ所なの？」
S「僕の家と○○君の家は違う所に在るのにね」

k 「変だな？」

T 「皆は同じ国の中に家が在るから同じ所を押さえたの」

S 「同じ国？」

k 「そうよ」「わかった。日本でしょ」

<考察>

- ・子どもたちは絵本を見るのと同じように地図の前にとどき集まって話し親しむ姿が見られた。子どもたちには違和感なく受け入れられたと感じた。

〔事例2〕

(1)ねらい

- ・日本の昔話や民話の紙芝居や絵本の読み聞かせを活動や遊びの中に取り入れる。
- ・遊びや意図的な活動を通して自国の文化に触れたり、かかわったりすることを楽しむ。

(2)保育者のかかわり・援助

- ・保育の中で出来るだけ多くの絵本の読みかせや、口演童話を取り入れいろいろな文化に触れられるよう保育・活動を計画する。
- ・子どもたちが楽しめるよう、いろいろな活動ができるように教材の工夫をし、一緒に活動に取り組んだり、遊んだりして楽しさを共有出来るようにする。
- ・子どもたち一人ひとりの思いや考えを表現する姿を大切に出来るようにかかわる。
- ・なりきったり、自分らしく表現している姿見守り、楽しく遊んでいる雰囲気を大切に作る。

(3)とりくみ

○「おむすびころりん」の昔話より

絵本の読み聞かせ以後数日が過ぎた。弁当のときウイナーを落としたA男が「ウイナーころりんすつとんとん」といいながら落としてウイナーを拾っているのをきっかけにリズム劇へと活動を広げていった。

だが、3歳の子どもたちには動きながらあらすじを取り入れていくことが難しく一人二人と遊びをやめていく子がみられた。そこで、リズム劇をする前に「おじいさんが畑にやって来ました。」とまず保育者が物語のはじめを話した。そして次からは子どもたちから続きの話を引き出すように「次はどうなるのかな？」の声掛けをしたり、話が続いた時には「すごい、よく覚えているね。」とか「そうだったね。ちゃんとおぼえているんだね。」などしっかり一人ひとりを認めたり、誉めたりしながら話の内容をつないでいった。

また、ある時は保育者が絵本の内容を話しながらどの場面もみんなで表現して遊んだ。この頃からリズム

劇の中でおむすびが転ぶ場面になると子供たちの中からリズムに合わせて「おむすびころりんすつとんとん、おむすびころりんすつとんとん」と歌うようになった。子どもたちもおじいさんになったり、おむすびになったりと次々と出てくる登場人物になって楽しんだ。回数を重ねる中でなりきったり、自分なりの表現を楽しむようになった。又、友達の表現の仕方を見て自分なりの表現を3歳児なりに考え始めた。

表現を楽しむようになった頃、少人数でリズム劇を行い友達を見たり、友達に見てもらったりといった活動を取り入れた。この頃になりクラスのみんがリズム劇を楽しみ始めたように思えた。

～お面作り～

リズム劇を楽しみ始めた頃、三角のおむすびのお面をひとつ作って机の上に置いておいた。するとT男が「僕、これがほしいな」と言って来たので作ることを持ちかけてみた。すると2～3人がつくり始めた。このとき一人の子どもが「梅干を入れたのを作ったよ」といってみせてくれた。この日みんなにこのことを話し、おむすび作りのきっかけになった。次の日、どんなおむすびがあるのかをみんなで話し合った。「ごま」「しゃけ」「こんぶ」「のりまき」「うめぼし」「たらこ」「エビフライ」「おかか」「にく」などいろいろなおむすびのあることを知った。そこで画用紙に三角や俵がたを書いて置いておいた。子どもたち自分の好きなおむすびにする子、知っているものを全部書いたおむすびなどができた。これをかぶってリズム劇を楽しんだが、お面は家族に見せたいといってその日に持って帰った。

<考察>

- ・自国の文化大切にするためには、まず子どもたちが楽しく遊びに取り組めることが必要である。

(4)取り組みを終えて

- ・事例1の取り組みでは世界地図を保育室に掲示することにより見られた姿である。保育者は掲示する前まで幼稚園に世界地図なんてと考えていたが子どもたちは絵本と同じようにかかわり自分たちに合ったかかわり方を見つけていっている。こうした姿から子どもたちがそのものに積極的にかかわり自分たちにふさわしいものにしていくのではないかと感じた。
- ・子どもたちは沢山の疑問を感じながら少しずつ自分なりのかかわりを持ちながら大きく育っていくのだと考えた。
- ・事例2の取り組みでは自国の文化に触れてほしいと考え取り組んだが子どもたちが活動を楽しむまでに

は、押し付けや無理やり引っ張っていったところもあり教材の工夫が足りなかったことを反省する。お面作りをする頃には子どもたちも積極的に遊びに取り組み姿が見られたように思えた。しかし子どもたちは本当に自国の文化を感じることができたかは疑問である。こうした遊びや活動を繰り返し体験することによって自国の文化の伝承ができ、心が豊かになっていくのだと考える。

IV 初年度(平成15年度)の研究のまとめ

初年度の幼稚園、小学校、中学校での実践事例の概要は、報告された通りである。以下では、本年度の取り組みを通して得られたこと、および来年度に向けての課題を述べる。

単元開発において、最も大切なことはいかに幼小中の発達段階に適合した活動を作り、実施するかということであろう。幼小中の各レベルにおける取り組みをまとめてみる。

まず、幼稚園においては保護者に対するアンケート結果をもとに、3歳児については、友達とのコミュニケーション能力を育むことを目標として、世界地図というものとの関わりを通して、日本とは違った国があることをゆるやかに気づかせる活動を展開した。ほかにもリズム劇やお面づくりを通して、遊びや楽しい活動を通して日本の文化について豊かな理解を図ろうとした。

小学校では、6年間というスパンを二期に分けて、1～3年生においては多文化理解を深め、4年生以降では英会話学習へとつなぐため、広島大学への各国からの留学生との交流を行った。留学生の出身国に対する調べ学習を通して、国としての理解、さらにはそれを留学生個人への理解へと深めていくことができたと思われる。生徒による反応からも高い満足度が見える。たとえことばはできなくても、音楽、運動、料理、などによりいろいろな感覚を通してコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができたと期待できる。

そして、中学校においては、小学校と同じく留学生との交流をベースとした活動が展開された。学習内容として、真の意味での交流を実現するために、留学生から情報を得る「受信型活動」と、自分たちの学校生活を伝える「発信型活動」を展開した。ここでの理解は、単に情報としての理解を越えて、体験としての理解になるであろう。さらに直接的、face-to-faceのコミュニケーションは生徒にとって今後の英語学習への関心・意欲を高めてくれるものと期待される。

こうした活動を通して得られたことは、第1に、調

べ学習を通して、生徒一人一人が生きる活動が展開されたことである。それは言語によるコミュニケーションを通してだけでなく、音楽・運動・料理というような活動を通しての多文化理解、交流につながるものとなっていった。このことは、交流への満足度に関する学習事前・事後のアンケート結果からも明らかである。

第2に、生徒たちが留学生との双方向コミュニケーション活動を通して、自分たち自身のコミュニケーションスタイルを客観視する機会を持ったことである。特に、中学生の反応の中で、個人としてだけでなく、集団としての聞く態度を反省している部分が見られる。よく見れば、それらはみな日本人によく見られる文化事象であることに気づく。留学生との交流を通して、コミュニケーションに対する姿勢・行動を意識し、そして行動に変えていくことができる。

今後、こうした一つ一つの取り組みを企画、実施し、そして検証を重ねていくことが求められる。

V 今後の課題

研究に取り組むに際して、園児・児童・生徒への働きかけによって得られる変容について、つぎのような仮説を設定した。初年度は教室での活動から、小中を中心に留学生の訪問による直接的交流までを通して、それぞれの項目についてねらった成果が得られたと思われる。

研究仮説

- ①外国の事物にふれたり、外国の人々との直接的交流活動の機会を持ったりすることにより、児童・生徒が多文化をより身近に感じることができる。(知識・意識)
- ②外国の人々や海外パートナー校との交流を通して異なる視点や価値観を体験し、自文化に対する認識と多文化に対する尊重と寛容の態度を育成することができる。(理解・態度)
- ③外国の人々や海外パートナー校との交換を通して、コミュニケーションニーズを生み出すことにより、教科の基礎を発展させ、自発的、自主的な学習を促すことができる。(理解・表現)
- ④体験的学習や問題解決的学習を通して、小さな地球市民として異なる文化背景を持つ人々と協力して地球の未来を拓く姿勢や能力の基礎を養成することができる。(姿勢・行動)

次年度以降に向けて、次の課題があると考えられる。まず、授業ごとの取り組みを学年、校種にまたがるひとつの流れとして単元開発を重ねて、新領域「国際交流

学習」の設置を具体化していく必要がある。また、既存の教科との関わりも考慮しながら、三原学園の子どもたちの実態を踏まえた上で、私たちのめざす子ども像にむけて、つけたい力がどのくらいついたか

を見るために、アンケートに加えて組織レベルから授業に至るまでの評価方法を開発していくことが次の課題である。